

## 金星喆氏の発表論文に対するコメント

崔鉞植\* (韓国 木浦大学)

1. 金星喆先生の論文、「三論学の仏性論—立破自在、無依無得の中道仏性論—」を読み、よく理解していなかった三論学の仏性理論について体系的に分かりやすく整理していただいたと考えている。本論文で言及しているこの主題に対し、既存の研究がありはしたが、既存の研究は基本テキストの内容の紹介に止まったのに対し、本論文ではより主体的な立場でテキストが言おうとしていることを体系的に整理しており、そのおかげで一層理解し易くなったと考えている。インドの中観学と東アジアの三論学に対する発表者の長年の研究の積み重ねがあったからこそ、このような体系的で理解し易い説明が可能になったのであろう。私自身も、今回の発表を通して三論学の仏性論と三論学の特徴について多くのことを理解することができた。この場を借りて感謝を申し上げたい。

2. ご自身が明らかにしているように、この発表は既存の研究が主に『大乘玄論』に依るものとは違い、『大乘玄論』だけでなく、他の三論学の概説書である『大乘四論玄義記』と『大乘三論略章』の内容を含めながら、三論学の仏性論について論述している。発表原稿では三論学の仏性論の中で、特に中道正因論〔Ⅱ〕と仏性の本有・始有、理内・理外、見・不見に関する見解〔Ⅲ〕について説明されているが、二つの内容は基本的に『大乘四論玄義記』と『大乘玄論』の内容に依拠している(Ⅱは『大乘四論玄義記』の(2)、(3)、(4)―②と『大乘玄論』の(2)、(4)の内容に依拠しており、Ⅲは『大乘四論玄義記』の(4)―④、⑤、⑥と『大乘玄論』の(6)、(7)、(8)の内容に依拠している)。『大乘四論玄義記』と『大乘玄論』を見てみると、実際に本発表が提示した主題が三論学派の仏性論の重要な内容となっており、この点で本発表は三論学仏性論の核心をよく整理したものと考えられる。

しかし、本発表の場合でも重要な説明は基本的に『大乘玄論』に依拠しており、他

---

\* 최연식 (チェ・ヨンシク)。木浦大学校史学科教授。

の文献、特に『大乘四論玄義記』の活用は『大乘玄論』の内容を敷衍することに止まっているのではないと思われる。『大乘玄論』になく『大乘四論玄義記』にだけある内容について、発表者はほとんど言及しなかったためである。例を挙げるなら、『大乘四論玄義記』には仏性の正因以外に縁因（因、境界）と了因（因因、観智）、果（菩提）と果果（涅槃）について、そしてこれらと正因との関係について、かなり詳しい説明を行っているが、本発表では、それらは省略されている。『大乘玄論』の場合、因、因因、果、果果についての説明はほとんど省略されており、またこれらに対する三論学派に独特な理解方式が明確には提示されていないのに、本発表の因、因因、果、果果などに関する説明は基本的に『大乘玄論』の内容に限られているように思われる。また『大乘四論玄義記』には、顛倒衆生や二乗などに仏性はあるかという興味深い内容も見られるが、それについても本発表では省略されている。三論学の仏性論を明確に理解するためには、そのような内容も追加されなければならないのではないかと考えられる。

各文献別「仏性義」の構成（金星喆氏の発表原稿に依る）

慧均『大乘四論玄義記』	吉蔵『大乘玄論』	『大乘三論略章』
(1)明大意	(1)大意門	a. 十一の正因仏性論紹介
(2)論釈名	(2)明異釈門	b. 三論学の正因仏性である中道仏性
(3)弁体相	(3)尋経門	c. 中道仏性論の経典的根拠
(4)広料簡	(4)簡正因門	d. 一般的な五種仏性の説明
①弁宗途	(5)釈名門	e. 仏性の名前の解釈
②明証中道為仏性体	(6)本有始有門	f. 五種仏性の他の理論紹介
③論尋経仏性名	(7)内外有無門	g. 三論学の中道仏性論と五種仏性
④明本始有義	(8)見性門	h. 一闡提の仏性に対する他の理論
⑤弁内外有無	(9)会教門	i. 理内と理外の区分と一闡提仏性
⑥論見不見仏性	(10)料簡門	j. 凡夫一仏の仏性を牛乳に比喻
⑦料簡		
⑧会釈		

3. 本発表では、三論学の仏性論をより具体的に理解できるように『大般涅槃経』と『大乘玄論』『大乘四論玄義記』などの文章を引用し、それに対して詳細な説明している。引用された文章の翻訳と説明については、大部分同意できるが三論学派の中

道正因仏性論の核心として引用されている次の文章、

横論爲藥。則如向辨。豎則望道。只非衆生等即是正因。若言是是。非是亦何者。非衆生而説衆生乎。但非衆生而説衆生。此之衆生豈可言其是有。豈可言其是無。豈可言其是亦有亦無。非有非無耶。若識此衆生者。何為問非正因。乃至六法真諦義亦如此。若徹了深悟此。則正因佛性義已具足。前是横論一重。此復是豎論一重。便成兩重論正因義也。

平等大道無方無住故。一切並非。無方無礙故。一切並得。若以是爲是。以非爲非者一切是非。並皆是非也。若知。無是無非是。無非無不非。假名爲是非者。一切是非並皆是也。故知。上來十一家所説正因。以是爲是故。並非正因佛性。若悟諸法平等無二。無是無非者。十一家所説。並得是正因佛性。

については、(韓国語の) 翻訳を改めなくてはいけないのではないかと思う(発表原稿の注 61、62 を参照)。

(以下、韓国語の翻訳に関する議論が展開されているが、省略する)

4. 中道正因仏性に関する『大乘玄論』の文章を上のように翻訳したならば、本発表のⅡの内容中、三論学で仏性の正因を中道とした理由についての説明も再検討する必要があるのではないだろうか。発表では上の文章を主な論拠として、三論学で中道を本性の正因としたのは、衆生や心識などに代替される中道を、仏性の正因として提示しようとしたのではなく、仏性に対する概念的論議自体を破棄することで仏性の正体を表に出すことにあったと述べている。つまり「真正の仏性は理論や概念で理解されるものではなく、理論と概念の領域を越えたものとして体得される」ために、中道の正因を説明するための横論と豎論は「相手の主張を無力にすることで(中略)概念を通して正因仏性を追求しようとする試みそれ自体を転覆させる」ことであると言う。また「正因仏性はどんな概念や理論でも規定されるものではない」もので、「ある理論を正しい主張とし、他の理論は間違っていると排撃する「正しい、間違いの二分法」を超越すること」であるということになる。従って、「既存のすべての理論は正因仏性であり得ないが、もしすべての存在が平等であり、正しいとか間違っているとかいうことがもともと存在しないという点を悟れば、これらの理論すべてが正因仏

性になることができ」と言う。そしてそれがすなわち立破自在の三論学の仏性論であると述べている。しかし、上記の文章の内容で、なぜこのような解釈が導き出されなければならないのか理解に苦しむ。この文章だけでなく、『大乘四論玄義記』や『大乘玄論』のどこにも仏性の正因として説かれている中道が、理論と概念の領域を越えるもので、中道を説くことが正因仏性を追求しようとする試み自体を転覆させるものだという内容はないように思われる。また三論学派の中道正因仏性論が、ある理論は正しいと主張し、他の理論は間違っていると排撃する、正しいとか間違っているという二分法を超越しようとしているものであるかも疑問である。三論学派の立場は基本的に主張の違いを克服しようとするのではなく、存在自体に対する偏向した理解を正そうとするもので、自分たちの主張を明確に持っていると考えられるからである。

仏性の正因とはまさに仏性の主体、つまり何が仏性になるのかを探ることである。中国の南朝では『涅槃経』の影響によって、釈迦牟尼の本質、つまり仏性に対する探求が仏教界の重要な関心事となった。特に仏性の主体が何なのか、つまり何が釈迦牟尼になるのかという仏性の正因に関しては多くの学者たちによって様々な議論が行われた。三論学の文献で批判されている種々の議論もすべて釈迦牟尼になる主体を探そうとするものであった。三論学派もこの議論に参加しており、本発表で論じられているように中道を仏性の正因として提示した。しかしこの際の中道とは、『大乘四論玄義記』や『大乘玄論』の内容に依拠する限り、本発表で論じているように仏性の正因を探そうとする議論それ自体を転覆させるためであったり、ある理論は正しく、ある理論は間違っていると排撃する、正しいとか間違っているとかいう二分法を超越するものであったとは考えられない。また、この中道が理論や概念を越えたものであったとも考えられない。これらの文献で論じられている中道とは、明確な概念を持つものであったと考えられるのである。

『大乘四論玄義記』や『大乘玄論』では、『涅槃経』の内容に依拠して、非因非果の中道を仏性の正因であり正果であると提示している。これはまさしく、非因非果(非有非無)の存在が仏性である、仏性そのものと解釈されるということである。三論学だけでなく大乘仏教一般ではすべての存在は空なるものとして非因非果(非有非無)である。そのようなすべての存在が仏性であるということが三論学の仏性論であると理解される。つまり、どんなものであろうとも、その存在そのものが非因非果(非有非無)の仏性そのものであれば(あるいは、仏性そのものと理解したならば)、それが仏性の正因であり正果なのであるが、もし非因非果(非有非無)の仏性から外れる

と（あるいは、そのような仏性を理解できなければ）、仏性となることはできないということだ。このような立場では、従来の十家、または十一家の見解は、彼らが何を正因として提示したとしても、その非因非果の仏性を論じていないため正しくない見解になるが、彼らが提示した存在を非因非果（非有非無）の立場で理解するなら、すべて仏性の正因になりうると説いている。前で引用した文章はまさにこのような立場を論じているものである。

これと同じように、『大乘四論玄義記』や『大乘玄論』で説かれている中道の正因は明確な概念を持っており、理論と概念の領域を越えて始めて体得できることを示すための議論ではないと考えられる。

5. 三論学を専攻するものでないにも拘わらず、三論学の仏性論に対してコメントするということがましいことである。三論学の初心者として発表原稿を読み、多くのことを学ぶことができた。しかし私が『大乘四論玄義記』や『大乘玄論』の「仏性義」を読んで理解したことと異なっている点があり、問題提起を試みた。発表者である先生の御理解と御教授をお願い申し上げる次第である。

（翻訳担当：金剛大学）